

堀口藍園

ぶんせいがんねん 文政元年(1818年) - 明治24年(1891年)

藍園は、郷土の発展に尽力した教育者の一人で、吉田芝溪から続く渋川郷学を大成し、完成させた人と言われます。

藍園は、渋川村裏宿の紺屋(染物屋)堀口柳蔵の長子として文政元年(1818)に生まれ、同じ裏宿で家が近かった高橋蘭斎に漢学など初歩の学問を学び、木暮足翁には国学と和歌、周休には漢詩を学びました。また、吉田芝溪については藍園が生まれる7年程前に亡くなっており直接指導を受けてはいませんが、先師として尊敬していました。

紺屋のかたわら塾を開き、40歳で江戸・京都へ遊歴し多くの漢学者・漢詩人や勤王の志士らと交わり、帰郷後は塾の経営にも熱心に励みました。その後学制発布により一旦は閉じた私塾を明治10年に再開しました。教育者であり人格者でもあった藍園は人間平等を思惟し、差別する者を見れば憂えました。全ての人に学問を授け、人格を高められたらどんなに素晴らしいことかと考える藍園のもとへは県内各地から多くの門弟が集まり、門弟からは代議士・県会議員・郡長・町村長など多くの地方指導者が出たと言います。また、箕輪の牧野再龍と親しくなり、その弟子である大音龍太郎とも交流がありました。明治維新に際しては戊辰戦争三回峠戸倉の戦いに子の文平らを官軍側で参戦させたり、前橋藩主松平侯から上野総鎮撫使総長に任ぜられるなどした一方、群馬に逃れてきた彰義隊残党の助命を嘆願した話も伝わっています。

明治24年、74歳で生涯を閉じました。



堀口藍園の写真 渋川市立渋川北小学校所蔵

堀口藍園の略年表

西暦	和暦	年齢	できごと
1818	文政元	1	藍園、裏宿に生まれる
1823	文政6	6	藍園、母イセを亡くす
1827	文政10	10	藍園、荷物を運ぶ馬の尻を棒でたたき馬が暴れるのを見て喜ぶような、気が荒く乱暴な子としてこの頃知られる
1829	文政12	12	藍園、高橋蘭斎に入門。人一倍の勉強家で蘭斎門下の俊才と言われる。後に木暮足翁と周休にも入門
1835	天保6	18	藍園、高崎藩士鎌原氏の娘ムラをめとる
1843	天保14	26	藍園、父柳蔵を亡くし、一家を支える立場となる
1845	弘化2	28	周休の「小鵲集」、藍園が全部校訂に関わって発行
1852	嘉永5	35	藍園、近隣の人々からの頼みを聞き入れ家塾を開く
1857	安政4	40	藍園、江戸に遊学。大沼枕山、小野湖山らと交わる。京都にも赴く
1868	明治元	51	藍園、岸重兵衛や羽鳥久右衛門とともに渋川村の主になる。子・文平、友人の後藤八郎右衛門、門弟の入沢啓助らにすめ、戊辰戦争(三回峠戸倉での戦い)に参戦させる。彰義隊残党の助命に成功する。上野総鎮撫使総長に任命される
1869	明治2	52	藍園、村童教授に任命される
1871	明治4	54	芝溪60回忌にあたり有志らとともに吉田芝溪の墓への通しるべを建てる
1872	明治5	55	藍園、学制発布により家塾を閉じる
1873	明治6	56	学区取締役に任命される
1877	明治10	60	「私塾開業願」を楡取県令に出し、渋川村に藍園学舎を開く
1881	明治14	64	金蘭吟社第1回が上之町梅沢茶館で開催される
1885	明治18	68	藍園ら高橋蘭斎門弟が蘭斎高橋翁碑を建立
1886	明治19	69	門弟らが藍園の詩をまとめた『藍園詩鈔』を刊行する
1891	明治24	74	藍園、没す
1893	明治26	—	門弟らにより「堀口藍園翁碑」が渋川八幡宮境内に建立される
1820	大正9	—	藍園の門弟である荒木真平が「堀口藍園伝」を発行
1924	大正13	—	藍園に従五位が贈られ、贈位碑が渋川八幡宮境内に建立される
1952	昭和27	—	藍園の墓、群馬県指定史跡に指定

○年齢は数え年です。年代は前後することがあります。※この年表は、渋川市誌及び堀口藍園先生物語原稿(渋川北小所蔵)を参考に作成しました。

○引用及び参考文献

「渋川市誌第2巻通史編・上」/「まんが渋川の歴史」/「郷土渋川第9号」/渋川市ホームページ「旧渋川市地区の指定文化財」

寸暇を惜しんで学ぶ藍園^{らんえん}

仕事と勉強の両立を目指す

若くして父親の代わりに家族を養うことになった藍園は、それでも勉強を続けたい気持ちを諦められず、染物の仕事も勉強も両立しようと決心します。その一日は次のようなものでした。

店の職人たちより早く起き、はじめに仕事場をきちんと整理しました。

次に顔を洗い、職人を起こして朝食をとりました。

日中は、染物の仕事に精を出し、夜になると部屋に机を並べ、古い書物を学びました。

眠くなると墨をする暇さえ惜しんで古い帳面に字を習いました。

夜明けに一番鶏が鳴く頃、ようやく着物を着たまま眠り、また朝早く起きる・・・という毎日でした。

藍園と読書

藍園は、熱心に本を読み、読まなければならないと考えた本は、本にひもを通し、腰に縛りつけるほどでした。

また、染物をする時も、本を藍汁の入った瓶の蓋^{ふた}の上に置きながら読んだり、食事中、読書に夢中になり、ご飯の入っていない茶碗を箸でつついて、母親に笑いながら注意されたこともありました。

藍園は年老いてから、「世間の人には、本を読むと眠気を催すというが、自分は一度もそんなことはなかった。本を読んでいると、ますます興味がわいてきて眠気など起こらず、読書をやめたことはなかった。」と語っています。

結婚後の藍園

藍園のこうした勉強ぶりは、16、7歳の頃から一日も変わらず続けられたと言います。

年頃となった藍園は、母親の願いもあり結婚し、仲の良い家庭を築きながらも勉強をやめることはありませんでした。

藍園は、昼は仕事をし、夜になると、和歌をはじめ伝統的な日本の文学を木暮足翁^{こぐれそくおう}に、漢詩を周休竹溪^{しゅうきゅうちくけい}に学びました。疑問があれば、時には真冬の雪の中、真夜中でも教えを請いにきました。また、夜に詩を作り、それを弟子に持たせて周休に添削をしてもらうこともありました。

藍園は、このように時を無駄にすることなく、仕事と勉強を両立させたのでした。

実行を重んじた学問

藍園らんえんの学問

堀口藍園の学問は、広い意味で儒学に属しています。孔子や孟子を尊敬し、「論語、大学、中庸、孟子」といういわゆる四書や、「易経、書経、詩経、礼記、春秋」などの五経について学び、学んだことは必ず行うという実践を重んじました。そして曲がった学問や、世の中の俗悪にこびへつらうという態度を決して取ることはありませんでした。徳川幕府が政治を行うことに反対し、天皇が政治を行うのが正しいとする、尊王の考えを主張しました。頼三樹三郎らとともに尊王家として知られていた藤森大雅らと親しく交わったり、後に江戸に出て、大沼沈山、蒲生髻亭、小野湖山というような当時有名であった学者や詩人と交わり、詩や学問について話し合ったり研究したりしました。さらに、はるばる関西に出かけては、貫名海屋、橋本香坡というような名高い学者をたずね、その主張を聞いたり、学問や詩について議論したりして修養を積み重ねていきます。

藍園の正義感

藍園は、正義から外れた行いに対し、強く憤る心を持った人でした。しかし、正義から外れたことを改めるのに、自分から進んで熱狂的に革命したりしようという態度を取った人ではありません。すなわち、改革の機運が自然に高まってくるのを待つという、おだやかな革命家でした。これも生まれながらの性質もあったのでしょうか、染物に精をだし、家族を養わなければならないという境遇も手伝ったことと思われます。藍園は、自分の考えであった尊王の思想や精神を、自分の弟子たちなどに伝え、明治維新の味方を増やそうと考えていたようです。



【じっせんきゆうこう 渋川市立渋川北小学校にある「実践躬行」の石碑】

理想を求めて行動した人

藍園らんえんは、優れた教育者として多くの人々に慕われただけでなく、立派なおこないをする人格者として知られていました。普段は温厚篤実でありながらひとたび事が起きると勇猛果敢、己の信ずるところに向かって行動しました。

150名の命を救った行動

明治維新の際、彰義隊に加わり官軍に敗れた武士・白井幸助は150名程の部下を率いて逃れてきて、「自分は処刑を覚悟している。しかし、言われるままに行動したまでで何の罪もない部下達の命は助けてやってほしい。」と時の前橋藩主・松平直克まつだいらなおかつに部下の助命を嘆願しました。藩では、官軍の手前もあり、処刑した方が良いのか許した方が良いのか結論おおとりゅうたろうがなかなか出ませんでした。その様子を見た藍園は、当時新政府で高い地位についていた大音龍太郎おおとりのりゅうたろうを訪ね、「刑を受けることを覚悟して降伏してくる者に罪はない。これを殺してしまうことは人としての道に外れるものである。『窮鳥懐きゆうちようぶところに入れば獵師も殺さず』はいと言う。官軍の要職にいて事を処理するあなたが、これに劣る事をするとは考えられない。慈しみを求め慈しみをすることは誠に快いことだ。」と理をもって説き、情を込めて話しました。龍太郎は大いに感動し、これらの人々を助けることを約束しました。藍園は藩主・松平直克にも同じように心を込めて話し、直克もまた深く感激して罪を許すことを決意し、白井幸助以下全員の命は救われました。

なお、藍園と龍太郎は以前から親交があり、のちの西南戦争の際には、西郷隆盛の味方をして東京を追われた龍太郎を藍園がかくまったと伝えられます。

人々の幸せを願い、学問を授ける

藍園は、世間の人々が衣食足りて喜びがあふれることをいつも願っていました。明治4年に公布された解放令によって法的には身分制度はなくなったものの、藍園が生きた明治の世は、江戸時代の封建的な考え方が強く残っていましたが、このような社会の中で藍園は人間平等の考えを持ち、人を差別することなく差別する者を見れば憂えました。とりわけ教育者でもあった藍園は、「分け隔てなく学問を授け、人格を高めさせるようにしたならばどんなに素晴らしいことか。」と考えました。ある青年は、昼間は一所懸命家の仕事に精を出し、深夜になると書物を抱えて藍園を訪ね指導を受けました。それは何年にもわたり、藍園は青年の姿に自分の若き日々を重ねてか、青年の将来を楽しみにしていたと言います。藍園は、また、門弟一人一人の資質や境遇に合わせ、気鋭で攻撃的な塾生には穏健な篤行人の伝記を、消極的な塾生には進取の気象である人物の伝記を読ませるといように個に応じた教育を行いました。学校のない時代に藍園の塾には県内各地から大勢が集まり、門弟からは代議士、町村長、議員、銀行頭取など多くの人材が出て新時代建設に活躍し、群馬県初代県令かとりもとひことなった楫取素彦をして「今や群馬県の政治は藍園翁の門弟らの手で行われている。」と言わしめました。

※ 「進取の気象」進取=みずから進んで事をなすこと、気象=気性に同じ（広辞苑）

書道家としての藍園^{らんえん}

藍園は、詩人や教育家として有名でしたが、書道家としても優れた人物でした。ここでは、藍園の書道家としての一面を紹介します。

藍園は書道家として、草書を最も得意とし、そのすばらしさは県外を含め世間の人に知れ渡っていたと言います。その書も人々に大切にされ、次のような話があります。

・町の人々は、家を建てると藍園の書を座敷などに飾ることを誇りとして、藍園の書がないと大変悲しんだ。

・人々が藍園について噂をする時は、まず藍園の書について話し、その後、染物屋の主人として…といった順番で話した。

それでは、藍園はどのように優れた書道家となったのでしょうか。

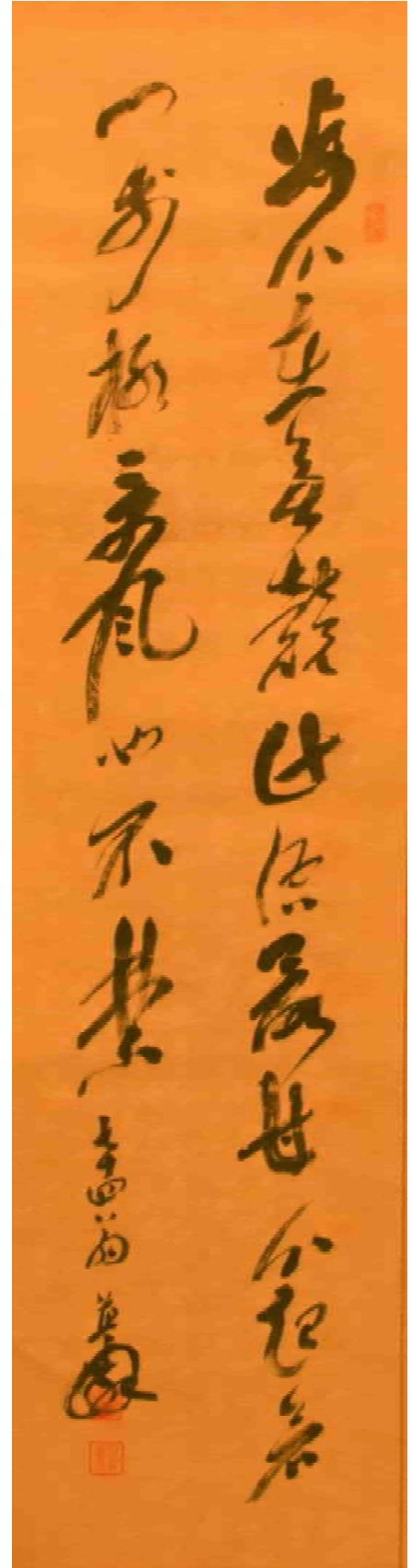
一つに、暑い夏でも、寒い冬でも、寝る時間も惜しんで、一年中変わることなく真剣に練習を積み重ねたことです。糸を染める時は作業に使う棒を、火鉢の灰をかき回す時は火箸を、人と話し合っている時は指を使って、どのような時でも字を習っていました。

もう一つは、藍園の人柄にあったと考えられます。書はその人の品格を表すものと考えた藍園は、上達してもまだまだ自分の書は未熟であると考え、いっそう励むという謙虚な心を持っていました。

上毛の三筆といわれた書道家の角田無^{つのだむ}幻^{げん}の書を手本とし、人々からは自身の書を褒めたたえられましたが、「自分はまだまだ未熟である」と周囲の人々に話したといいます。

このように、たゆまぬ努力と謙虚な心をもって書に取り組むことで優れた書道家になったと言えます。

安心在無競此語最甘心起看
門前柳受風如不禁
七十四翁 藍園



【藍園の書(掛け軸) 石坂家所蔵】

染物屋の主人としての藍園^{らんえん}

仕事を大切にした藍園

藍園は、教育家、書道家、詩人として優れていましたが、家業である染物の仕事を大切に、まず仕事に精を出し、余力があれば勉学や詩作、書道に励むというやり方を実践しました。

誠実な仕事ぶりで繁盛

藍園の家業の染物屋は屋号を「菜田屋^{なたや}」といい、創業は元禄時代頃に^{さかのぼ}遡ると言います。

店には、たくさんの染物が積んであり、藍園は店奥の座敷にあるいろいろのそばに座って、働いている職人の様子を見たり、お客さんの応対をしていました。もっともこれは藍園が50歳を過ぎてからのことで、それ以前は自ら染物を行いながら、お客さんが見えたと急いでお客さんの前に行き、丁寧に挨拶^{こうや}し、親身になって応対しました。

染物屋(紺屋)の仕事は、「紺屋の明後日」(※)といわれるほど、約束より遅れることが普通で、世間の人々もそのように思っていました。菜田屋ではそのようなことはなく約束をきちんと守りました。

また、安い値段で注文を引き受けた時も、染物の仕上がりが悪ければ、職人にやり直しを命じ、しっかりしたものを渡したと言います。

このような誠実な仕事ぶりで、来客や注文が多く、店先には染物がうずたかく積み、多くの職人が昼夜一生懸命仕事をして、間に合わなかったと言います。

同業者の中には、客が少なくなり、転業しようとする者、菜田屋のまねをする者や値段を下げて対抗しようとする者が現れました。当の藍園はそのようなことは気にかけず、先祖からの「信用、誠実な仕事」を守り、仕事に当たりました。

このような仕事ぶりから、菜田屋は繁盛し、「染物といえば菜田屋、菜田屋といえば染物」と言われるほど有名であったと言います。



※紺屋の明後日：約束の期限が当てにならないことのため。紺屋(染物屋)の仕事は、天候に左右されるため遅れがちで、仕上がりの期限をいつも「明後日」と言い訳していたことが由来。

藍園と漢詩

藍園は、人格形成には学問・徳行・芸術・家業どれも重要なものと考え、生活基盤である家業に精励し工夫改善して能率を上げることを説き、知情意の調和的発達を目指しました。書・画・漢詩・和歌などの芸術を身につけることにより、豊かであるおいある人格形成がなされることを願っていました。

藍園自身も漢詩を周休に学び、秀でた詩人として名を知られました。生涯にわたり詩をつくることを人生の楽しみとし、家業の染め物の仕事で疲れていても夜更けまで詩想を練ったと言います。

藍園詩鈔について

「千首を下らず」と言われる程多くの詩をつくった藍園ですが、自分からすすんで詩を公表し名声を求めるようなことはしませんでした。弟子達は「このままでは先生が詩を書いた紙が散逸してしまふ。それは詩界や文壇のためにも誠に惜しい。」と考え、お金を出し合って詩集の発行準備をし、藍園に発行許可を願い出ました。藍園は、「私の詩集を出すことは自分の気持ちに反する。自分が作った詩はまだ未熟で恥を世にさらすことはしのびがたい。むしろ紙片はねずみなどにかじられた方がましだ。」と言って断りましたが、弟子達が何度も熱心にお願ひした結果、やっと許しをもらい、序文には藍園の知人で有名な詩人や学者達(明治の三詩人に数えられた小野湖山や大沼沈山、初代群馬県令の楫取素彦、法制学者で多くの法律起草に関わった細川潤次郎等)に寄稿を依頼し、明治18年、「藍園詩鈔」が発行されました。

後年、昭和56年に「藍園詩鈔訳註」を刊行した岸八一氏(金井)は、「詩鈔全文を写しているうちに、藍園先生の人格が心にうつり、涙の出るほどの感激を覚えた。偉大な郷土の生んだ大先生を心ある方に知っていただきたい。」と記しました。また、岸氏の著書を活字・復刻化し、平成20年に「澁川の華」を刊行した絵と本の木かげ館館長の品川秀男氏(金井)は、同書の中で、「(藍園は、)先生として深く信頼され尊敬されたので、おのずと彼の詩にも『清く正しく』という傾向が強くなったのだと思う。その結果世間の腐敗や政治の乱れに強い批判を加える詩が多くなったのだろう。一方、自分の教え子や地域の人に対しては、温かい気持ちを忘れずに、そういう人々を応援する詩が多い。」と藍園の詩への感想を述べています。

藍園詩鈔は、藍園が詠んだ漢詩のうち319編を選び、上中下3巻にして刊行されました。原文は全て漢字で書かれています。

卷之上…自身の境遇や立場などを折り込んだ人生観や、英仏や会津城などの幕末における情況、人々を苦しめた長雨や麻疹、明治3年に起きた平沢川洪水、都丸梁香、大音龍太郎らとの交友関係等

卷之中…吉田芝溪の師であった平沢旭山の墓参り(東京深川)や小田原、久能山、桑名、木曾山中などへの旅、木暮足翁、楫取素彦、狩野利房らとの交友関係等

卷之下…箱根、浜松、伊賀山中などへの旅、周休、細川潤次郎、松本凌波らとの交友関係等

藍園の詩から

藍園の詩には、藍園の生き方や人生そのものが表されています。決しておごりたかぶらず努力を続ける人であった藍園。その人物像が次の詩からも読み取れます。

『藍園詩鈔』 卷之上より

今茲丁卯賤齡五十偶得長律

この明治三年自分も五十になって
思いがけなく七言の詩ができた

得失悲歡五十春

得たり失つたり悲しんだりしながら
五十の春を迎えた

難逢世運與時新

二度と会うことのできない世に生まれて時を過ごしたが
世の成り行きは月日の流れと共に新しくなっていく

未能免俗愧高士

この年になってまだ俗物であり
自分は徳の高い人を見て恥じ入るのであり

有不慊心思哲人

自分の心の中にあきたらない事が多く
もつと賢明な人たちに学ばねばならぬと思っている

濃淡霞消山歴々

外を眺めると今、濃淡の霞が消え去って
山がはつきりと美しく姿を見せており

浅深氷解水粼々

浅深に張った氷もとけて
水が増し石に激して流れている

更驚乾雪點雙鬢

さらに驚くことは乾いた雪が飛んできて
左右の鬢の毛についた

阿母老孱年七旬

私の母も年をとって弱く
もう七十になったことである

藍園らんえんと弟子たち

藍園の教え

藍園が弟子たちに特に奨励したことは、「人柄が実直、素朴で、思いやりの深い行いをする」と「常に道理にかなった言動をとること」でした。そのため、ぜいたくや投げやり、怠けの心、権力に頼るといったことなどを強く戒めました。しかし、その教え方は、ただ叱ったり、言葉で教えるのではなく、藍園自身が実行し、次第に感化していくというやり方でした。

昼は仕事に励み、夜は遅くまで書物を読み勉強に努める藍園の姿を見て、教えを願う者は増えていき、ついには、県内各地から弟子入りする者も出てきました。一時は、数十人が藍園の家に寄宿して勉強したと言います。

藍園塾の様子

藍園は、弟子が増えても、家業をやめて、教育だけに取り組むというやり方はしませんでした。弟子が少ない頃は、仕事場におしろを敷き、その上に弟子たちを座らせ、自分は染物の仕事をしながら教えていました。弟子たちは足が痛く、渋い顔をして本を読んだと言われます。弟子たちは、このように本を習い、それが終わると字を練習しました。藍園は、夜になると弟子たちが書いたものを直し、翌日、返しながらその出来のよしあしについて説明しました。弟子の数が増え、こうしたやり方が難しくなると、弟子の中で優秀な年長者を選び、塾頭とその補助者として、年少の者の指導に当たらせました。午前中は読書を中心として、午後は字を習わせたり、詩を作らせたりしました。藍園自らは、明るいうちは、仕事に精を出し、夜になると部屋の中央に机を据え、弟子たちを円形に座らせ、四書五経、十八史略、国史略、史記といった書物の講義をし、指導に当たりました。

藍園と弟子

藍園塾で指導を受けた弟子たちの数は、千人を超すといわれています。これらの弟子たちの中からは、後に県議会議員や町村長といった地方政治の要職で活躍した人々が多く輩出されました。このような人たちは、藍園の教えにより、おごらず、質素儉約を誇りとし、道理にかなったことをつくすことに喜びを見出したと言います。藍園もまた、そうした弟子たちの正しい行いを見聞きするにつけ、我がことのように喜び、自分にとっても榮譽と考え、自分のことよりも弟子たちの名声が一層高まることを願ったと言います。

このような様子を見て、世の中の人たちは、かえって藍園を褒めたたえたため、藍園の名声はますます高まったと言います。